

# 人と人とのつながり —縁の深い地域社会を求めて—

09K074 渡辺 百枝

## はじめに

「失われた10年」という言葉がある。これは、国や地域の経済が不況になることを表現したものだ。日本では、バブル景気崩壊後1990年代から2000年の10年間で「失われた10年」と呼ばれた時代だ。しかし、日本国内は今もなお経済的状況は一向に良くならず、「失われた20年」に突入してしまうと危惧されている。

経済だけが失われたのだろうか。私が生まれてから20年以上経ったが、物心がついてからというもの、特に電子機器に関しては目まぐるしい発展を遂げている。携帯電話やパソコンを1人1台当たり前に持つ時代となった。ちょっと外に出て周りを見渡せば、携帯電話を手から離さず、ずっと画面ばかりを見ている若者や中年層が多い。また最近ではSNS<sup>(注1)</sup>サービスも盛んになり、直接目と目を合わせて会話をしなくとも、相手が何をしているか、どこにいるか、何を考えているか、が分かるような時代だ。故に、バーチャルな世界で他者と繋がりができたとしても、現実的に直接顔と顔を見合わせ、ふれあう機会を失ってしまったのではないだろうか。便利さが、人と人のコミュニケーションを奪ってしまったのだ。買い物に関してもそうである。昭和時代までは地域の「商店街」が家の台所であるといわれたように、なくてはならない存在であった。しかし近年、大型ショッピングセンター等の普及により、商店街で買い物する客が減少している。多くの商店街が「シャッター通り」と呼ばれ、賑わいを感じられなくなっている。また、「ご近所づきあい」を苦手とする若者が増えたのか、地域の行事でさえも様子が変わりつつある。

「失われた10年」以前の日本人は果たして、人と人のコミュニケーションを苦手とする国民であっただろうか。江戸時代から明治時代にかけての日本の制度は、人と関わる機会が多いものがあつた。今はなくなった制度であるが、そこには現代を生きる私たちが忘れてしまった、大切な人と人とのつながりが隠されているだろう。

時代の流れと共に、社会の環境が変わってしまうのは当然のことである。しかし、守るべきものは変わらないと私は考える。東日本大震災後や少子高齢化が進む今日、「共働」や「絆」、「助け合い」という言葉が日本中を飛び交っている。いつの時代にでも変わらない「守るべきもの」は、古い日本を見直していけば、きっと答えがでてくるのではないだろうか。経済不況のように、人と人とのつながりまでもが「失われた20年」にはなりたくないものだ。私はここで、昔の良いところを見直し、残さねばならぬ「人と人とのつながり」や新しいコミュニティの在り方、地域社会を創造していく。

## 第1章 「無縁社会」と呼ばれる日本

「無縁社会」とは、家族や地域、会社などで、人との繋がりや絆が薄れ、孤立した人が増えている現代社会を表す。2010年にNHKが、こうした現代社会の孤立をテーマに取材をしてきた中でうまれた言葉である。

近年、核家族化や少子高齢化、未婚化や失業率の増加に伴い、ライフスタイルの変化が急激に表れている。「縁」というものを大切にしてきた日本人であったが、このような社会現象の中で、人と人とのつながりが途絶え始めてきている。地域とのつながりや、家族との関係も変わり、現代社会は「孤」の時代へと進んでいる。なぜ今日本が「無縁」と呼ばれているのだろうか。

### 1-1 変化する「縁」

#### 広がる孤立

「誰も助けてくれる人はいません。孤独で耐えきれなくて、心が折れそうです」「まるで心の中は無人島で暮らしているに等しいです。孤独そのものです。私が死んでも誰が気づいてくれるでしょうか」<sup>(注2、引用)</sup>

自分の周りに誰もいない、助けを求められる人がいない。現代の日本社会はこうして、人と人とのつながりが失われた「孤立」の社会へと進んでいる。精神的な孤立、一人で住むことの孤独、このような「孤」が無縁へと通じているのではないだろうか。現在、年間32000件にも及ぶ、「孤立死」。これは様々な「縁」の変化が生み出したものである気がする。

#### 家族のカタチ

そもそも、家族とはいったいなんなのだろうか。男女の結婚を通じて形成された家族を基点とし、その夫婦の間に生まれた子供との関係を直系家族ないし核家族と称する。これが家族のカタチ。また、血縁とは、その周りにいる夫婦の親や孫、叔父、叔母、甥、姪などの親族を指す関係である。<sup>(注3)</sup> 直系家族にせよ核家族にせよ、家族というメンバー内での愛情の深さや親密さ、経済的、精神的な面でお互いを助け合い尊重する姿が血縁関係の特徴だ。

日本における家族のカタチは様々なものが存在していた。まず、「大家族制」と言うものが挙げられる。これは、核家族のまわりにいる親族が同居している状態を指し、祖父母や孫が共に同居しているカタチである。一般的に「三世代住宅」と呼ばれるものであろう。時には四世代が一緒に住むこともあったし、成人した兄弟姉妹や叔父、叔母、甥、姪が共に同居することもあった。「家父長制度」と言うカタチもある。これは、家系において夫を家長として君臨させ、その長男が後継ぎとして家系を末代まで長続きさせる慣習を意味したものだ。祖父から父、父から長男が家を代々守る。妻や二男、長女などのその他の家族は家長をサポートする役割としての存在であった。「良妻賢母」。まさにこの言葉がよく似合う家族のカタチだ。妻は夫のために、尽くすというカタチである。明治時代になると、「大家族制度」と「家父長制度」は、「家」制度としてカタチを変えることになった。この「家」制度によって、家族の中の夫婦間や親子間での主従関係は明確になった。「家」制度の成立により、家族内の秩序の安定をもたらしたという効果によって、戦前の日本経済の発展につながったという考えもある。

これらの家族のカタチに、それぞれのメリット・デメリットがあるものの、共通して言えることは、家族が制度によって結ばれており、それぞれの役割があるということだ。しかし、今日の家族のカタチは、簡単に「孤」を生み出すことのできるゆるい関係で結ばれているものもある。

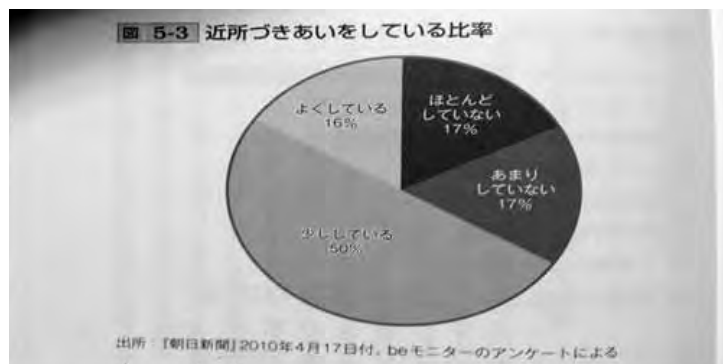
2012年10月11日から12月20日までの木曜日、フジテレビ系列で『結婚しない』というテレビドラマ

が放送されていた。主人公の女性2人が、「結婚とは何か、必ずしも結婚しなくてはいけないものなのか」ということを考えたドラマであった。最終回で、1人の女性は「通じ合っていれば結婚しなくてもそれぞれが信じる道を歩いていける。」と言い、婚姻届を紙飛行機にして飛ばすシーンがあった。私はこれに疑問を抱いた。「結婚しなければ、家族はできないではないか。」ということ。婚姻届を出さずに事実上の結婚をし、家族と生活している人も世の中にはたくさんいる。様々な理由があり、このようなカタチになっていることも分かる。しかし、ドラマでこのようなカタチを放送したという事は、内縁関係推奨ともとれる。「通じ合っていれば結婚は必要ない。」こういった考えで法律上で家族となるという行為から逃れる人々が増加すれば、日本における血縁の姿はかわってくるだろう。このままでは家族のカタチの変化によって、将来、孤独になる人が増え、ますます無縁となっていくてしまう。これもひとつの無縁社会へと導かれるひとつの要因だと考える。

### 地域の中での縁

地域の縁で「地縁」という言葉がある。地縁とは、同じ地域に住む近隣の家をまとめて、最小単位の社会組織を表現する言葉である。<sup>(註4)</sup> 数多い家を集めて、大きな単位を意味する地縁には、江戸時代の藩や明治時代以降の県・市・町・村などの行政単位があげられる。数少ない家を集めてできた小さな単位の地縁では、江戸時代の五人組や明治時代以降に出来た町内会があげられる。両者ともに、同じ地縁に属する人々には共同体意識があり、相互監視や相互扶助の役割が期待された。

地縁は、奈良時代における「五保制」が始まりとされる。社会の安定を保つために、五戸または五つの家族を集めて最小の社会単位をつくった。目的は、お互いを監視し合い、何か問題があれば助け合うかたちをつくるためであった。後に、江戸幕府は「五人組」制度を設けた。これもまた、お互いの生活を監視して犯罪予防や内部告発に期待をし、治安を維持することが一番の目的とされていた。また、家族内における婚姻や養子縁組、遺産相続の後見人になることも要求されており、「共同」という意識の高いところで生活を送っていたことになる。現代の地縁はどうだろうか。昔の相互監視・相互扶助にあたるものは、今でいう「ご近所づきあい」であろう。しかし、江戸時代に比べ、現代はそう濃い付き合いをしていないのが実際のところだ。



このグラフは、「近所づきあいをしている比率」<sup>(註5)</sup>を表したものである。よくしていると答えた人は16%、ほとんどしていない人、あまりしていない人が17%、少ししている人が50%となっている。よくしていると答えた人を外せば、約8割の人々が昔のような相互扶助のご近所づきあいをしていないのだろう。では、なぜご近所づきあいをしないのか。次のグラフが、「ご近所づきあいをしていない理由」である。<sup>(註6)</sup>



「時間や機会がない」という解答を答えた人が最も多い。これは、ご近所づきあいに全く興味がない解答ではないと言えよう。しかし、「関係がこじれると面倒」「隣人と気が合わない」「過去にトラブル」というものは、地縁の人間関係の複雑さを物語り、非協力的であることがうかがえる。

昔のような、相互扶助・相互監視の精神で、お互いを守り助け合うという地縁はもはや現代にはない。隣同士の人とのつながりさえも面倒と感じてしまう時代だ。プライバシーを守るだけで、他人は関係ないと思ってしまう地縁もまた無縁社会を生み出す原因となっている。

## 1-2 奪われた顔と顔のつながり

携帯電話やスマートフォンが普及していなかった時代を生きていた人々が口々に言うのは、「時間の流れがゆっくりしていた」ということである。確かに、現代の若者たちは、ちょっとした隙間時間でさえも携帯電話を手放さない。実際、私も暇があれば携帯電話の画面をみて過ごしている。こういった行為が大人には「忙しそう」と感じられているのかもしれない。一体若者たちは、携帯電話の画面をみて何をしているのだろうか。

よく使う機能割合

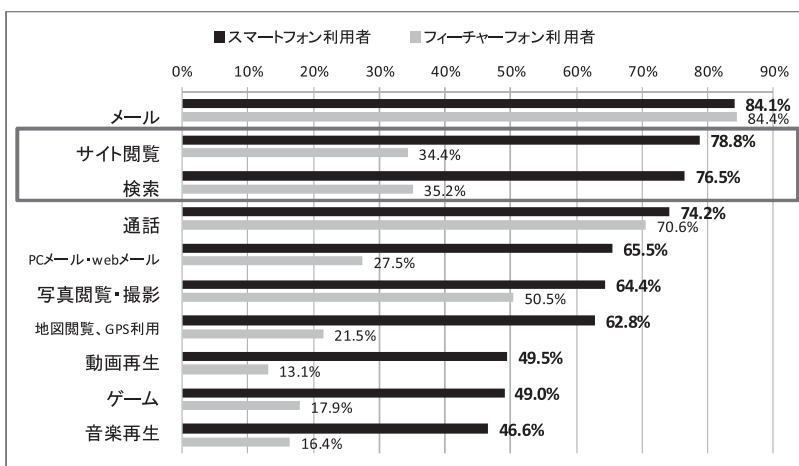


図 (注7)

これは、2011年9月にデジタル・アドバタイジング・コンソーシアム株式会社が、スマートフォン利

用者1000人とフィーチャーフォン利用者1000人<sup>(註8)</sup>を対象とし、「スマートフォンにおける利用実態調査」を行った結果である。スマートフォン利用者とフィーチャーフォン利用者、それぞれを比較して表している。ご覧の通り、メール機能を使う人が最も多い。スマートフォン利用者は次いでサイト閲覧、検索として利用する人が多く挙がっている。電話やメール機能などでしか利用してこなかった従来の携帯電話と違い、サイトを閲覧したり、気になるものを検索したりする道具として利用している。スマートフォン利用者は「電話」という感覚を超え、「小さなパソコン」感覚で利用しているのではないだろうか。画面ばかりをみている人が大勢いる理由がここで分かるだろう。

携帯電話はもはや、肉声を使って会話するようなコミュニケーションの取り方をする道具ではなくなっている。2008年10月に調査会社アイシェアが、同社のサービス会員417人を対象に、「携帯電話といえば自分にとって何のための道具か？」という質問を同時にあげたところ、最も多かった回答が「メールするための道具」で80.3%という結果、「話すための道具」で68%となった。次いで「コミュニケーションするための道具」と答えた人が53.3%いたようだ。この、「コミュニケーションするための道具」とはどういうことか。

### 画面の中のコミュニケーション

私は、近年流行しているSNSが大きく関係していると考える。SNSは、人と人とのつながりを促進、サポートするコミュニティ型のウェブサイトである。友人や人間間のコミュニケーションを円滑にする場所や手段として、多くの人々に利用されている。出身地や出身校、趣味などを表示することができ、知り合い同士でやりとりすることはもちろんのこと、見ず知らずの人ともコミュニケーションを取ることここでは可能となる。言わば、顔が分からない人とも知り合いになれる不思議な世界観である。こうした世界観の中で生きることを、充実と感じる人も少なくない。この世界にどっぷりと依存している人もたくさん存在する。

Twitter<sup>(註9)</sup>と呼ばれるSNSサービスがある。「とりあえず急ぎの仕事は終わった」、「ツイッターを見ながら昼食なう」などと、自分が今、何をしているか、何を考えているかなどを文字に表し、ネット上に公開することのできるサービスである。「なう」というのはツイッターでよく使われる言い回しで、英語のnowのことであり、「今、私は〇〇している」ということを意味するものだ。多くのツイッター利用者はこのような表現を用いて、自分を表現している。携帯を握りしめ、このようなつぶやきを発している人々にとって、これが生活の中心になっているといっても過言ではないようである。

「ツイッターにハマってから日常がめまぐるしくなった。読書やゲームにあてるリソースが減ったと思うし。何よりつぶやいてないと気が済まない。私はツイッター依存症か？」

「ツイッターだけが今の私の友達」<sup>(註10)</sup>

このように感じる人は決して一人ではないだろう。言葉を声にしなくても会話ができる状態。たとえば友人が近距離にいたとしても画面越しにトークが膨らむ時代。全く顔を知らない人とでも、どこか「つながり」を感じる事が出来るこの世界観。SNSのサービスを利用する者にとっては、ツイッターなどのつぶやき機能につぶやく声こそが、自分の本当の心の声なのかもしれない。「フェイスブックではリア充ぶり、ツイッターでは愚痴しか言わない」と、友人から聞いたことがある。誰にも知られていない世界に自分がいるからこそ、胸の内を吐き出せる場所と化している。「現代社会では、人間関係もあってホンネは言えない。ツイッターの私がホントの私」<sup>(註11)</sup>。この言葉こそ、明確な人間関係希薄化を物語り、顔と顔

との直接のつながりを奪ってしまった原因と考えられる。

このような、電子機器でつながる縁を「電縁」と呼ぶ者もいる。一見、コミュニケーションがうまく取れているようにも思えるこの縁だが、上記のとおり、本当のつながりを得たコミュニケーション方法ではないと私は考える。誰にも知られない空間を自分一人で楽しむ場となっているかもしれない。直接人に話せないことだけをつぶやく場所となっているかもしれない。たとえ人と人との、心のつながりがそこで生まれていたとしても、やはり、目を合わせてみなければ本当の姿というものとは分からない。画面の中のコミュニケーションは、そういった見えない感情で包まれているのだ。

## 第2章 — 昔の賑わいから見る濃密な人間関係

携帯電話やスマートフォンがなかった時代はどんな世の中だったのだろうか。現代とは違って、画面越しに連絡を取り合ったり出来るはずがない。文字という記号だけでやりとりをするわけにはいかず、どうしても電話（肉声）で話したり、顔と顔を合わせて会話をしたりするしか手段はないだろう。一見、不便と思うこの行為だが、実はこれこそが濃密な人間関係を築き上げることのできるコミュニケーションなのではないだろうか。つい最近まではこのようなコミュニケーション手段があたりまえとされていたのだ。本章では、商店街と祭り文化についてピックアップし、そこでうまれていた人と人とのつながりについて考えていく。

### 2-1 商店街からみたコミュニティ

#### 昭和40年ごろの話

商店街にあるお風呂屋さんに行くとな、いつも一緒になる知らないおばさんがいたの。そのおばさんから化粧品屋さんの洗顔クリームをもらって毎日顔を洗っていたなあ。ちょっと高級そうなクリームを使えることがとっても嬉しかったのよ。洗顔クリームが入っている容器もお洒落だったから、空になったケースが欲しいとおばさんにねだっていたわ。昔はね、銭湯のほかにも、万代町通りにはたくさんのお店があったよ。肉屋さん、パン屋さん、八百屋さん、魚屋さんは今と変わらずもちろんあったし、文房具屋さんだってあった。本屋さん、おもちゃ屋さん、洋服屋さん、自転車屋さん、化粧品屋さん、とこやさん、……。そうそう、ペットショップもあったし、葬儀屋さんもあったわね。わずか500メートル足らずで生活の全てができるほどだったよ。いつも行く魚屋さんとかは、うちの家族構成をわかってくれているから何も言わなくても夕方になると、ちょうどいいおかずを持ってきたりしてくれていたよ。あー、あと紙芝居屋さんもいたわ。毎日近所に来ていた紙芝居さんを友達と見に行っていた。クイズをだしてくれるのがとっても楽しみだったな。でも考えてみれば、近くにダイエーができてからは、少しずつお店が減った気がするわ。紙芝居屋さんもいなくなっちゃったしね。

こう語るのは、私の母である。母は幼少期、家の近くにあった銭湯に通っていたという。母の話から、近所のおばさんに可愛がってもらっていたということが目に浮かぶ。現在は、商店街に並ぶ銭湯も減り、このような銭湯での交流はあまり見られないだろう。実際私も昔ながらの銭湯に通うことはない。大型ショッピングセンター等の普及により、商店街の店を利用して買い物をすることも減っている。しかし、母の銭湯でのやりとりや、おかずをもってきてくれる魚屋さんの話を聞いていると、商店街の店は忘れてはならない「交流できる場」である気がする。

## 東日本大震災後の商店街

商店街の魅力は何だろうか。長い間商店街取材し続けてきたフリーアナウンサー伊勢みずほ氏は、「商店街＝コミュニケーションのかたまり」と語る。取材を通じて、商店街の良いところは、「①地域のひととの絆 ②人と人との会話 ③コミュニケーションの関わり」とあると言う。大型スーパーでの買い物は決して悪いことではないが、買い物していてもそこに人と人とのつながりは生まれにくい。しかし、商店街は、常連になるほどに絆が強くなり、何かあれば助けてくれるという仲間意識のようなものが生まれてくる。ただ物を買うという行為だけではなく、人のつながりが生まれることこそが商店街の魅力であると伊勢氏は言う。

東日本大震災後、伊勢氏は実家のある宮城県仙台市に数週間滞在した。今回、震災後の商店街の様子を語ってくださった。

「震災後、地域を救ったのは商店街の個店の店主たちだったと思うわ。大型スーパーやファーストフード、コンビニなどは何日たっても開けなかったの。危険性を考えて開けられなかったというのもあるだろうけれど、目の前で地域の人が困っているのに、助けられない（お店を開けない）ということに不信感を抱く人も正直、多くいたわ。それに対して、商店街の中にある小さなお店は、店主の考えで店を開けられるでしょ。お店の中が危険だと感じたら、外で商売をするなど工夫をこらしていたわ。自分の考えで店を開けられる、そして人の役に立つ。そういうことが出来るのも商店街のお店の魅力よね。そしてね、商店街のお店の人っていうのは、「地域の知っているおじさん、おばさん」でしょ。だから気兼ねなく声を掛け合うことができるのよ。商店街のお店が、「震災」という同じ体験をした者同士がお互いを励まし合える場所ともなっていたの。こういった場所で、人と話すことで不安がとりのぞかれていっているということを私は実感したよ。私の実家がある仙台市は比較的都会だったけど、このような交流がうまれていたよ。田舎のほうではもっとこういった助け合いがあったんじゃないかな。いざ！というときのためにも、商店街を守っていく必要があると私は考えているよ。」

東日本大震災後、商店街の存在がどれだけ地域住民の救いになっていたかということを感じられたお話であった。震災後は、電気の復旧にも時間がかかったために、携帯電話やスマートフォン、パソコンなどはあまり利用できなかったのではないだろうか。このときばかりは、第1章で述べたようなバーチャルの世界とはつながってられない。本当のひととひとのつながりが大事になってくるのだ。伊勢氏のお話の中で、「商店街では同じ体験をしあった人が声をかけあったことで、少しずつ震災の不安がとりのぞかれていった。」という言葉が聞けた。お互いに励まし合い、助け合ってこられたのだろうなあということが想像できる。顔と顔とを見合わせ、時には共に泣き、時には共に笑い合う時間もあつたらう。これこそがまさに伊勢氏の言う「コミュニケーションのかたまり」である商店街の姿なのではないだろうか。商店街という場で、人と人との絆が強くなり、お互いを助け合うという仲間意識が生まれ、「支え合い、交流できる場所」と再確認できたに違いない。

## 交流できる場所

伊勢氏が、取材をしてきた商店街を本にした『まちかど行ってみずほ』の中にも、銭湯のエピソードがある。新潟県上越市高田の一場面だ。

「名前も知らない者同士、背中を流しあいこしたんだよねえ」と話す九十歳と八十歳のおばあちゃん。

「昔は銭湯があったから裸のお付き合いが出来て、ご近所さんとも絆が深かった。みんなと会える銭湯が大好きだった」どれほどこの商店街にとって銭湯が大きなそんざいだったことか。かつて、多くの人が疲れを癒した人気銭湯「朝日湯」。新潟県中越地震で煙突が折れてしまい、営業再開を諦めました。でも、こちらのご夫婦は素晴らしい！町民が集う場所がなくなってはいけないと、風呂場を大改築して誰でも立ち寄れる広場として開放。男湯だったスペースはご主人の仏像彫刻アトリエに。女湯は洋室に変身して大きなテーブルが…。かつての「お風呂友達」が連日のように集まり、お茶とおしゃべりを楽しんでいらっやいます。形は変わっても、ここが地域の皆さんの「憩いの場」であることは変わりません。<sup>(註12)</sup>

今日、大型ショッピングセンター等の普及により需要がなくなりつつある商店街だが、「憩いの場」としてコミュニティを失わぬよう維持している商店街店主はこのようにいる。どこにいても物が何でも買えるようになった時代。ちょっと車を出せばすぐにスーパーに行ける。ネットショッピングを利用し、家で買い物が出来る。まったく便利になった時代である。このような状況の中で、商店街は必要ではないかと思ってしまう。しかしどうだろう。上記のような、高齢者が集う「憩いの場」が無くなってしまっは、あとに行く場所がなくなってしまう。絆が深い場所。みんなと会える場所。現在の商店街は、このように人と人とを結ぶ場所となっているのではないだろうか。銭湯のコミュニティだって、大切な交流の場であるのだ。名前を知らない者同士が裸になり、仲良くできるところほど濃密な人間関係を築ける場所はないだろう。環境と共にカタチが変化してしまっても、変わらないものは変わらない。そう、商店街とは、人と人が「交流できる場」なのである。そして若者が商店街に行き、人生の先輩がたくさんいるところで楽しく会話をしたならば、それは「生きることを学ぶ貴重な場」となるのだ。

## 2-2 神社、祭り文化からみたコミュニティ

日本中、どこにでも神社というものは存在している。日本という場所に住んでいる以上、地域にある地元の神社のお祭りには誰もが一度は出向いたことがあるのではないだろうか。

「子どもの記憶として残るものは、祭りの縁日。」—こう語ったのは、流作場鎮守三社神社<sup>(註13)</sup>の禰宜、大橋忠廣氏である。今回私は、大橋氏に神社や祭り文化からみた地域のコミュニティについてお話を伺うことが出来た。また、新潟万代太鼓華龍の代表である田村佑介氏にも、長年祭りに参加したり神社と関わったりして感じていることを伺った。

### 現代の祭り

少子高齢化に伴い、子どもの数が昔に比べて圧倒的に減っている。よって、祭りで「子どもの参加」というものが減っているという。それと同時に、核家族が多くなっているというのも祭り参加者減少の大きな原因ではないかと大橋氏はいう。今の若者は、新しい団地に住みたがる傾向がある。またご近所づきあいをしなくてすむようにマンションに住みたがる人が増えている。そういった人が増えていく中で、「地域の祭り」というものはどんどんと見失われてしまっている。

祭り自体のやり方が変わってしまう場合もある。よく、「けんか祭り」と呼ばれる祭りが多くあるが、そのやり方にも変化がみられると田村氏はいう。田村氏は、沼垂のけんか祭<sup>(註14)</sup>に毎年参加しているそうだが、年々規制が厳しくなり、昔のような「本気のけんか」が見られなくなっていると言っていた。昔は凄まじい喧嘩が祭りの中で繰り広げられていたようだが、今はそんなに激しくないそうである。祭り参加者がルールを守らなければ、規制は厳しくなるに違いない。人のモラルが問われる。しかし、そんなモ



ラルを育てられる場も神社であるような気が私はする。

### 賑わいある「マチ」

「祭り」とは、神様を「待つ」というところからきている。人々は神様が来るのを待ち、お祭りをやったところには、人々がたくさん集まった。「神様を待つ」という行為から人が集まり、「街」ができたという一説があると大橋氏は言う。

神様を待った場所が街となり人が大勢いた場所となるなら、そこは大変賑わっていたということであろう。言い換えれば、コミュニケーションが盛んなところだったともいえるのではないだろうか。「神社」というものは、地域の中心であり、核となるものが昔はあったという。幅広い世代のいろんな人が集まり、コミュニケーションをはかる場所であったようである。祭りの日が近付けば、地域の人は神社に通い祭りの準備を始める。三社神社には、「敬神会」という会が存在している。敬神会は、三社神社の神様に特別の信仰があつた人たちの集まりだそうだ。氏子<sup>(註15)</sup>などの人たちが、「神様が守ってくれるのなら、そのお返しに何かできることがないか」と集まってできた会。例えば、お祭りの前に、境内の草取りをしたり、街に旗を立てたりする作業も「神社のため」になるのだ。実際、私の祖父母も長年、草取りや提灯の飾りつけに協力していた。このような行為が、神社を残すための力となり、伝統を守ることに繋がっていると大橋氏は語る。また、昔は大人も子どもも一緒になって神社に手伝いに来たり、遊びにきたりしていたことから、ここで顔と顔が知れる仲の関係が生まれていたようだ。誰もが、一人ひとりの子どもに対し「〇〇さんの家の子」と認識していたから、挨拶をしあつたり、悪いことをしていれば叱つたり、「社会で子どもを育てる」ということができていた時代であった。昔からの言い伝えなども、親から子へ、子から孫へとつながっていった。

### 心のよりどころとしての神社

神社は、一般の人が何かを相談しに来たり、気軽に話に来たりしていい場所と思っていと大橋氏は言う。しかし、今では「神社＝敷居が高い場所」と思われ、神社の中に入ってこない人がたくさんいるようだ。特に若者には神社に足を運ぶ人が少ないのではないだろうか。だが、田村氏は何か相談したいことがあると、大橋氏に話をきいてもらいに神社に行くそうである。田村氏は、「神社は勉強になる場所」と言っている。たしかにそうかもしれない。昔は地域の核となり、神社を通して子どもを育てることのできていた場所だ。「神社」という場所に集まる人々で、ひとつのコミュニティがうまれる。幅広い世代の人が、もう一度神社に集まり、昔のような賑わいを呼び戻せたら、街も活気づくだろう。そして、多世代で交流し合い、大人から若者はモラルを仕付けなおしてもらえるに違いない。たくさんの人が一緒になって楽しむことのできる神社の「祭り」だからこそ、子どもの記憶に一番残るのが縁日の様子といわれるのではないだろうか。神社と祭りは、幅広い世代のあらゆる人々が、濃い人間関係を築いていける場所であると私は考える。

## 第3章 － 地域コミュニティを守る

時代の流れと共に、昔の賑わいや活気を感じられなくなった今日、人と人とのつながりが希薄化しているということは、何度も述べてきた。しかし、そんな中でも、地域とのつながり、人と人とのつながりをもう一度見直し、顔と顔が知れた仲を構築し直そうと活動している人々はいる。

2012年7月5日、新潟市江南区健康福祉課が主催をした「第6回福祉のネットワークづくり交流会」に参加する機会があった。平成24年度江南区・福祉の学び舎事業<sup>(注16)</sup>の一環である。第一部のパネルトーク、テーマ1では「地域福祉の潜在的ニーズを浮かび上がらせる「地域福祉マップづくり」とは？」と題し、中村はま氏（西区緑ヶ丘自治会）と佐藤信三氏（亀田第6区町内会）のお二人がトークを繰り広げた。テーマ2「ボランティアに参加する“若者”の生の声！～若者のボランティアカ～」では、掛川洋規氏（新潟大学大学院生）と渡辺百枝によって、ボランティアを経験する学生の声を紹介された。この交流会に参加したことで、個人的に、江南区の方とのご縁がたくさんうまれた。

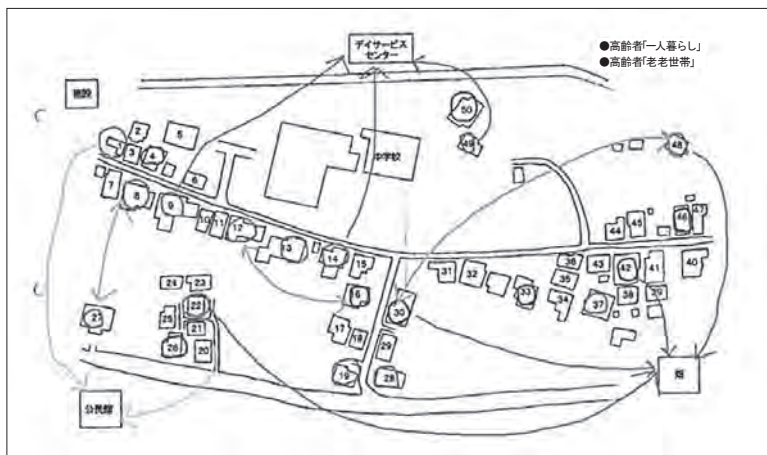
第3章では、テーマ1のパネルトークを基に、マップづくりで広がる地域コミュニティを考察する。また、3-2では、曾野木地区のボランティアグループ「七味の会」の会長、五十嵐武子氏に、地域行事を行うようになったきっかけ等をインタビューする。

### 3-1 「地域福祉マップ」からみえるつながり

個人情報保護の観点から、なかなか地域福祉の現状を地域が把握することが難しい今日、「地域福祉マップづくり」という手法を用いて情報を共有する取り組みが生まれている。

「地域福祉マップ」には4つのポイントがあると、江南区健康福祉課大阪一男氏は語る。

- ① 「地域福祉マップ」とは、作ることが目的ではない！  
→地域の現状を把握・共有する、地域の課題を解決するための手段の一つであり、地図をつくるわけではない。文章や表ではイメージを共有することが難しいが、マップにすることで視覚的にイメージ共有しやすくなる。
- ② 定期的な更新が必要ない！  
→「地域福祉マップ」は、地域住民の現状等を把握するための手段なので一般公開はしない。よって定期的に新しいものをつくる必要はない。
- ③ 地図には井戸端会議で出てきた内容を書き込む！  
→区役所や民生委員が持っているような細かな個人情報不要である。「〇〇さん家のおばあさんは最近、畑を始めた」「最近医者に通っている」という井戸端会議で話されるような情報を地図の中に書き込んでいく。
- ④ 地域の現状を把握することで、地域の福祉課題が見えてくる。



※地域福祉マップ例

マップを作ることのメリットは、世帯の状況がはっきりと見えてくることである。マップ上に一人暮らしの高齢者世帯、高齢者だけが住む老老世帯を書き込んだり、世帯ごとの日常行動パターン等を記入したりすることで、世帯同士のつながりが見えてくる。逆に、どこもつながりが見えない世帯が浮き上がってくることもなる。地域福祉マップによって世帯分布や人とのつながり、福祉課題等が「見える」化し、課題の解決に向けた取り組みをすることが可能になることが、最大の利点となるといわれている。

このようなポイント、メリットを踏まえて、実際に地域福祉マップをつくってきた自治会はどのような手ごたえを感じているのだろうか。新潟市江南区にある西区緑ヶ丘自治会は、厚生労働省による安心生活創造事業<sup>(注17)</sup>のモデル地区に指定されたのをきっかけに、マップづくりに取り組んだ。実際にマップづくりに携わった中村はま氏は、パネルトークの際、このようなことを語った。

#### (地域福祉マップづくりに取り組み始めた理由は)

正直に言うとな国の安全安心創造事業のモデル地区に指定されたのがきっかけで、せざるを得ないという状況でした。しかし、実際やってみて、分からなかったものが色々分かるようになって、よかったと今は思っています。3年間でマップを作るというスケジュールでしたが、最初の1年間は何もせず、研修会に行ってきました。最初は「何でこんな余計なお世話をしなくてはならないのだろう?」「人の情報をマップに落としていいのかな?」「これをするによって何の役に立つのか?どう活用できるのか?」と不安になりました。しかし、やっていくうちに、大事なものが見えてきました。大阪さんの説明にもあった通り「作ることが目的でない」ということがよくわかってきました。あまりにも隣近所とのつながりが薄すぎて、昔あったものが全くなっていることに携わった人全員が気付きました。もっと線が繋がっているものだと思っていたのが全然なくて、お隣さんが何をやっているのかということが分からない関係にあるということに気付きました。

当時は新興住宅地で45年前にみんな一斉に入居した結果、一斉に高齢化が進行していることにも気付きました。世帯構成別では高齢者の一人暮らし世帯、高齢者のみの世帯、高齢者と同居している世帯、高齢者のいない世帯の4つで色分けしました。その結果、高齢者の色がだんだん濃くなってきている、若い人がいないことにもみんなが気づきました。そして、人とのつながりが大事だということが分かってきました。

自治会は全部で876世帯、10個の班(80世帯位)に分かれていて、班単位で班長、班の役員、民生委員の6人くらいでマップを作りました。そこに社協や西区の福祉課の人たちが「参加させてほしい」と加わったため、一生懸命やらなくてはならないと思ったものの、ふりかえてみると、やってみて結構楽しかったです。余計なお世話でおせっかいな個人情報だけれど、支え合いにつながるのだから、遠慮なく出し合ってマップに書き込もうという雰囲気になって、「この人は…」「この人が…」とみんなが言い合って井戸端会議のような感じで楽しかったです。単なる人の噂話でなくみんなが思いやりを持って携わっていたので、遠慮なく話ができたのだと思います。

作成に携わる人が各戸を1軒1軒廻るということはありませんでした。あくまで自分たちが持っている情報だけでマップを作りました。世帯構成別の色分けは世帯表などのデータを用いましたが、世帯同士の繋がりについてはそこで出た情報だけで作りました。やってみて気付いたのは、自分たちも高齢者なのだという自覚と世帯同士の繋がりが無いということでした。

#### (マップを作った後の変化は)

高齢者が多いことと世帯同士のつながりが薄いことに気付いたので、自治会の婦人部を福祉部に改め、今まで民生委員が行っていた、月に一回、高齢者世帯への「ヤクルト配り」を自分たちで行うよう

になりました。そうすることで、この年になって福祉のことが分かるようになりました。そして、一人暮らしの高齢者の方とも良い関係が出来ていると思います。一年半ヤクルト配りをやってみて、「人は人と関わらなくては生きていけない、大事なことなのだ」ということに気づかされました。世帯の孤立は避けられない、だから、「つながりが大事」ということが分かりました。ヤクルト配りをする人が今まで8人でやっていたのが、今年から13人になるなど、活動そのものが地区の皆さんにも知られるようになったと思います。民生委員だと守秘義務があってなかなか立ち入れないところにも、地域の人同士気軽に言い合える関係が出来ているかなと思います。

[中略]

地域の中で欠けているものが分かって、「つながりが大事なんだ、助け合いが必要なんだ」ということがみんな分かって、その中でヤクルト配りや古紙回収などの活動を通してつながりを持つことが大事だったんだねという状況にあるので、マップづくりは楽しかったけれど、今はそれを活用はしていません。作ることが目的ではなくて、作って何を思うかが目的のだと、作ってから分かりました。<sup>(注18)</sup>

「地域福祉マップ」をつくったことにより、自治会内の状況が明確にわかるようになってきている。「Aさんの家とBさんの家が仲良く近所付き合いをしている。」「Cさんの家は、誰とも付き合いがない。」「3丁目のおばあちゃんは最近老人ホームに通っている。」こんな、なんともないような会話の中にも、多くの地域のキーワードが詰まっている。そのキーワードを地図に書き込むだけで、その自治会の問題や課題点が見えてくる。問題や課題を解決するために、高齢者の一人暮らし世帯には、自治会の子どもたちが月に数回、顔を見せに行つてあげてもいいだろう。若手がいない高齢者世帯には、一緒に買い物に出かけてあげてもいい。緑ヶ丘自治会は実際、ヤクルト配りや古紙回収の方法を改め、地域のつながりをつくりなおした。顔と顔が知れた仲をつくり、そこから助け合つて生活していくことにより、「無縁」を回避できるのではないだろうか。

作成者同士が井戸端会議をした内容こそがマップ完成の道筋となるのだから、作成者同士の仲がより親密になることはもちろんだろう。しかし、このマップづくりはそれだけではない。たわいもない会話から生まれたものが、隣近所の救いの手につながるのである。「マップづくりは楽しかったけど、今はそれを活用はしていません」。中村氏がこう語るよう、「地域福祉マップ」の作成中が、一番地域状況を知ることのできる時間であるのだろう。そして、作り終わった完成形は、課題として頭の中にインプットされる。紙切れが必要ないくらいに地域のことを知り、人と人とのつながりが親密になった証拠である。

### 3-2 幅広い世代との交流

核家族化が進む今日、子どもが高齢者と、高齢者が若い世代と交流する機会が少なくなつてきている。しかしそんな中でも、幅広い世代での交流機会が絶えてしまわぬよう、様々な活動を行っている団体がある。私は今回、新潟市江南区の「曾野木七味の会」会長、五十嵐武子氏にお話を伺う機会ができた。2012年7月の「福祉のネットワークづくり交流会」がご縁で出来たつながりである。その際、毎年年末に曾野木七味の会が運営している「歳末ふれあいお楽しみ会」でアトラクションとして参加してほしいというお話をいただいた。私は、新潟万代太鼓を当日披露してきた。会場には、曾野木七味の会のメンバーをはじめ、曾野木地区の高齢者がたくさん集まっていた。

驚いたことに、高齢者の中に混じつて数十人の中学生や高校生も参加していた。話を伺つてみると、この中学生たちはボランティアの学生だそうで、毎年参加しているという。また、アトラクションの中には



園児のお遊戯も組まれており、小さな子の踊る姿にお年寄りにはにこにこ喜んでいた。こうした三世代に渡る交流会、そのコミュニティは素晴らしいと感じた。そこで私は、歳末ふれあいお楽しみ会をやり始めたきっかけを調査するために、曾野木七味の会会長の五十嵐氏にお話を伺ったのである。

#### 「曾野木七味の会」とは

昭和60年3月17日誕生。民生委員の活動にも限界があるので、何とかこのような活動を地域に広め、地域の方々の協力を得ながら続けようと、団地婦人部・農協婦人部等に呼びかけ、ボランティアグループ「七味の会」が誕生した。現在28年目となり、現会長の五十嵐武子氏は2代目会長として12年間務めている。

「七味」とは、「愛・和・優しく・美しく・明るく・豊かに・思いやりの心」という七つの味（心）で美味しい手作り料理を作りたいとの思いで命名された。曾野木七味の会はもともと、「ふれあい給食」（注）をから始まったボランティアグループである。



昭和61年、市の社会福祉協議会から地域在宅福祉活動モデル事業の指定を受け、地区の社会福祉協議会や自治会、地区民児協、育成協、七味の会等で「在宅福祉活動推進委員会」を組織化した。その後も継続して、社会福祉協議会や自治会などから活動助成を受けて「ふれあい給食」や「世代交流」「友愛訪問」を三本柱として活動を一層充実させ続けている。

また、活動が活発になるにつれて、「福祉は特定の人」という意識から、地域の福祉サービス活動に積極的かつ気軽に参加するという気運が高まってきた。安心して生活できる地域づくりを目指して、地域の協調と連帯感を深めながら「豊かな長寿社会」の実現を目指している。そんな曾野木七味の会の活動の合言葉は、「できる人が、出来る時に、できる事を」である。

## 活動内容

曾野木七味の会は、主に9つの活動を行っている。

### (1) ふれあい給食

年に7回、一人暮らしの高齢者・寝たきり高齢者・高齢者世帯・障がい者などの方に、曾野木七味の会メンバーが作った手作りのお弁当を食べる時間を設けている。また、学校の週休二日制に伴い、平成14年度より土曜日に中学生と一緒に手作り弁当を届ける交流宅配も行っている。これは年2回、5月と2月に行われている。

### (2) 世代交流

幅広い世代が交流できる催し物を開催している。1年に一回ずつ、「三世代交流会」と「歳末ふれあいお楽しみ会」を行っている。三世代交流会では、児童から高齢者までの約250名が毎年参加し、昔遊びをしたり、今流行りの遊びを教え合ったりしているという。ここでもまた、ふれあい給食などを行っている。世代を超えた交流の場となっている。歳末ふれあいお楽しみ会では、園児から高齢者までの約350名が参加し、レクリエーションやアトラクションをみんなで楽しんでいる。この際、小学生はボランティア体験を行っている。中学生はボランティアとして会場づくり、調理の手伝い、お茶出し、配膳、後片付けを手伝っている。

### (3) 友愛訪問活動（市・区社会福祉協議会主催 乳酸菌飲料持参訪問も含む）

75歳以上の一人暮らし高齢者、80歳以上のみの世帯、寝たきり高齢者を対象に、見守りや安否確認、話し相手や相談等を行っている。民生委員が中心、曾野木七味の会とチームを組んで友愛訪問活動は実施されている。また歳末は、おせち料理の宅配も行っている。

### (4) 特別養護老人施設へ訪問ボランティア

新潟恵風園、新潟新生園の各施設へ月2回以上出向している。活動内容としては、おむつたたみ、お散歩のお手伝い、行事のお手伝いである。これは曾野木七味の会が中心となっている。

### (5) いきいきサロン「そのきふれあい会」平成12年9月より

自治会の集会場を会場とし、70歳以上の高齢者が自由に集まることのできる会合。仲間づくりや生きがいづくり、健康講座、おしゃべりやお茶飲み会が目的である。年12回の開催のうち、6回は団地内の3つの保育園、幼稚園の園児たち（公立2件、私立1件）が来訪遊戯をしたり歌を歌ったりしている。ここもまた世代交流の場となっているようだ。

### (6) 会報「しちみ」発行

平成元年に創刊し、曾野木七味の会メンバーによって年3回発行されている。各町内に回覧し、地域住民への情報発信媒体となっている。



会報を通して、住民は、ボランティアや在宅福祉活動に対して理解と協力が深まっているという。掲載内容は毎回自由ではあるが主に、児童や生徒のボランティアに参加した感想や園児の絵が掲載される。

(7) 学校へ出前ボランティア

生活科の学習等で2校(曾野木小学校、東曾野木小学校)へ昔遊びを行う手伝いをしている。ここで出会った生徒たちは、世代交流の際、ボランティアに参加するようになる。

(8) 定例会 月1回

給食の献立を考えたり、事業内容の相談を行ったりしている。

(9) その他

上記8つ以外にも、市民健康福祉祭りに参加したり、江南区ふれあいさくらまつりに参加したりしている。また、ふれあい給食で、季節感を取り入れながら喜ばれる弁当を考えるために調理講習に参加している。介護講習やボランティア育成のための講習等も行い、曾野木七味の会発展のためのボランティア研修に励んでいる。

## 五十嵐会長にインタビュー

**Q** 歳末お楽しみ会を始めた経緯は何だったか？実際にやってみて、地域のつながりや人と人とのつながりに変化はあったか？

**A** 歳末お楽しみ会は、事業内容の1つである「世代交流」の中の一環として始めた。昔は曾野木七味の会が全体の運営をやっていたが、現在は資金の関係で社会福祉協議会が中心となって動いている。このイベントに参加してくれる学生ボランティアの子どもたちは大変優しい。ボランティアがきっかけで子どもたちと顔見知りとなり、街中でも声をかけあえる仲となった。また、学校の先生方も協力的でいてくださる。この場を借りて感謝したい。地域でのボランティア精神を育てられる大切な場所であると感じる。

五十嵐会長は学生ボランティアの方々に、ボランティアを快くやって、いかに大切さを感じてもらえるかを常日頃試行錯誤しているという。当初、ボランティアに参加してくる生徒の中には内申書のためだけに嫌々ながら出てくる者もあったという。しかし、何の仕事もボランティアとしてやってもらえば楽しさを感じてもらえるかということ曾野木七味の会メンバーで考えてきた。その結果、今では、みんなが積極的にボランティアに取り組んでくれるようになったそうである。

ふれあい給食や世代交流会があったからこそ、若者と会話する機会が増えたと五十嵐会長は語っていた。中学生が高齢者宅などに宅配給食に行くと、給食をもらった高齢者や障がい者は、嬉しさのあまり涙する人もいるそうだ。中学生もまた、「僕、おばあちゃんにイケメンって言われた！」と喜んでいるそうである。「生徒たちは感謝され、笑顔や喜びをもらい感動して、優しい心や思いやりの心がここで育まれる。」と五十嵐さんは言う。確かにその通りであろう。こういう小さな出会いが、人と人とのつながりを生み出す。お互いに声が掛けやすい仲となり、挨拶し合えるようになる。幅広い世代間でたわいもない会話ができるようになる。これはまさに、様々な事業を通して生まれた、本来の地域のあるべき姿なのではないだろうか。こういった「ボランティア」から生まれるつながりも忘れてはいけない。

五十嵐会長は、これからの地域社会、もっともっと幅広く世代交流ができる地域になってほしいと願っていた。今後も自治会と曾野木七味の会でしっかりと手を組み、活動に取り組んでいかねばならないと言っている。そう考えるうえでまた、若者、特に中間層の世代にもこういった活動の理解を深めてほ

しいと言っていた。「無償ボランティア」というと、やりやすい反面、若者に理解されにくい部分がたくさんあるという。しかし、いつまでも今の曾野木七味のメンバーの方々が活動していくわけにはいかない。いずれ、「世代交代」が課題となってくるのではないだろうか。そういった面からも、若者の力が重要視されている。現在、中学生でボランティアをやってくれている人が将来、このような活動を理解し、広めていってくれるようなサイクルが生まれればいいと私は考える。

「曾野木七味の会をはじめ、みんなと仲良く交流ができ、たくさんのお知り合いが出来た。健康でボランティアを続けられてよかったと今は感じている。これからも健康を維持して頑張っていきたい。」と五十嵐会長は最後に熱くお話ししてくださった。

## 結論

「無縁社会」と呼ばれるようになってしまった日本社会だが、「つながり」は求めれば生まれるということをおぼえてはいけない。

時代の変化と共に、家族のカタチや地域社会との関わり方の意識に変化がうまれていることは本章で述べた。直接人とふれあう機会を面倒くさがり、バーチャルな世界だけでつながりを求める若者もたくさんいる。一方で、高齢者が一人になってしまわぬよう地域で助け合っているところもある。世代間で人とつながりに対する意識が違うのも、幅広い世代が交流していけない理由のひとつだろう。

しかし、東日本大震災後、被災地では若者も高齢者も関係なしにひとつになったという現状がある。お互いを助け合い、支え合い、守り合う。全てを失ってしまったからこそ、唯一の「人と人とのつながり」が大切になったのだ。こういった経験をした日本人は今後、「無縁社会」というものをもう一度考え直すだろう。私からみて、祖父母世代の地域との関わり方は極めて濃密である。これは昔、濃い人間関係を築き上げてきた結果であろう。今の若者たちがバーチャルな世界とだけでつながっていたら、高齢になったとき、きつとつながってられる人が少ないだろう。近い将来、誰もつき合いがないという世の中になってしまわぬためには、昔のように、地域行事に参加したり、地域の商店街に足を運んだりすることによって、「顔と顔とが知れた仲」をつくりあげる。そうしなければ、何かあったときに人は、もはやコミュニケーションの取り方さえも忘れ支え合うことができなくなる。人と人とのつながりまでもが「失われた20年」にならないように、若者世代がより地域に介入していく必要があるのだ。そうすることによって、より活発な地域社会となり、「無縁」と言う言葉は忘れ去られ、「つながり」ある社会になっていくような気が私はする。

---

### 注記

- 注1) 人と人とのつながりを促進・サポートするコミュニティ型のウェブサイト。日本では2004年ごろからサービスが始まった。
- 注2) NHKスペシャル取材班『無縁社会』株式会社文藝春秋、2012年 p3171 1,2
- 注3) 橋木俊詔『無縁社会の正体 血縁・地縁・社縁はいかに崩壊したか』株式会社PHP出版、2011年 p125参考
- 注4) 橋木俊詔『無縁社会の正体 血縁・地縁・社縁はいかに崩壊したか』株式会社PHP出版、2011年 13414参考
- 注5) 橋木俊詔『無縁社会の正体 血縁・地縁・社縁はいかに崩壊したか』株式会社PHP出版、2011年p211  
図5-3引用



- 
- 注6) 橋木俊詔『無縁社会の正体 血縁・地縁・社縁はいかに崩壊したか』株式会社PHP出版,2011年 p212  
図5-4引用
- 注7) [http://www.dac.co.jp/Contents/pdf/press/2011\\_sd\\_research.pdf](http://www.dac.co.jp/Contents/pdf/press/2011_sd_research.pdf)
- 注8) スマートフォンを除く携帯電話の総称
- 注9) 140文字以内の短い投稿(ツイート)を入力して、みんなで共有するサービス。情報インフラ。
- 注10) NHKスペシャル取材班『無縁社会』株式会社文藝春秋,2012年 p24013-6
- 注11) NHKスペシャル取材班『無縁社会』株式会社文藝春秋,2012年 p259116
- 注12) BSN新潟放送『まちかど行ってみずほ:おいしいたのしい新潟の商店街めぐり』  
新潟日報事業社,2009年p118引用
- 注13) 鎮座地 新潟市三和町一番一号 創建年月日 延享四年丁卯四月二十六日
- 注14) 毎年8月16日、沼垂地区で開かれるまつり
- 注15) 一定の地域を守護する氏神を、その地域内に居住して奉斎する人たち。
- 注16) 「みんなが先生・みんなが生徒」という「めだかの学校」精神で企画・運営する「区民による区民のための」地域福祉プログラム
- 注17) 厚生労働省が選定する地域福祉推進市町村が実施するモデル事業。「悲惨な孤立死、虐待などを一例も発生させない地域づくり」を目指し、行われている。
- 注18) 第6回福祉のネットワークづくり交流会の第一部にて、西区緑ヶ丘自治会の中村はま氏のトーク内容を引用

## 参考資料

### 〈文献〉

- ・NHKスペシャル取材班『無縁社会』株式会社文藝春秋,2012年
- ・橋木俊詔『無縁社会の正体 血縁・地縁・社縁はいかに崩壊したか』株式会社PHP出版,2011年
- ・BSN新潟放送『まちかど行ってみずほ おいしいたのしい新潟の商店街めぐり』新潟日報事業社,2009年
- ・新雅史『商店街はなぜ減るのか 社会・政治・経済史から探る再生の道』株式会社光文社,2012年
- ・社団法人全日本冠婚葬祭互助協会『無縁社会から有縁社会へ』株式会社水曜社,2012年

### 〈URL〉

- ・[http://www.dac.co.jp/Contents/pdf/press/2011\\_sd\\_research.pdf](http://www.dac.co.jp/Contents/pdf/press/2011_sd_research.pdf)
- ・[http://www.fujitv.co.jp/kekkon\\_shinai/story/index11.html](http://www.fujitv.co.jp/kekkon_shinai/story/index11.html)

### 〈インタビュー〉

- ・五十嵐武子氏(2012年12月17日 曾野木地区公民館にて)
- ・伊勢みずほ氏(2010年度日本事情論2レポート参考,2012年1月7日 喫茶店にて)
- ・大橋忠廣氏(2012年12月12日 三社神社社務所にて)
- ・田村佑介氏(2013年1月7日 ファミリーレストランにて)
- ・渡辺尚子氏(2013年1月6日 家にて)

### 〈資料協力〉

- ・曾野木七味の会
- ・特定非営利活動法人 まちづくり学校

(卒業論文指導教員 佐藤渉)